



市民の選択 を振り返る

自民・安倍政権への 不審と不安の 全国情勢

岐阜市長選挙直前の全国的情勢は、安倍政権の一人勝ちへの懸念が広がっていました。野党では旧民主党勢力の分散と、希望への不審、立憲民主党の躍進が、国民の政治への気分を表現しているように思えます。森友問題等への不審に代表される「勝ちすぎた自民」勢力への不安は、反対勢力への投票行為へ地方選挙でも向かうように思えました。

困難にした 候補者選定 の事情

岐阜市政では長期政権への停滞感が市民に充満していたように思えます。4年前の選挙で1507票差まで柴橋候補に肉薄された事実は、現職としては敗北していたと言えます。現職は2017年前半には出馬に意欲があったと分析出来ます。自ら不出馬表明はなかったと思います。口厳しい市民の声には「信長450プロジェクトは、市長の出演増加対策」と批評する声もあるようです。

昨年後半に長期政権の綻びが表面化します。職員のパワハラ自死問題で判決確定（毎年1人の自死だが、本年に入り既に1人の自死が発生）。大きな監査請求が2件起こされました。メディコス問題、東部クリーン問題が置き去り時点では、意欲なしと判断されました。市民は現職以外の候補者に目が行っていましたが、現職の表明遅れが結果として自民候補者選定を遅延させました。経過は市民に好印象と成っていないようです。

変化を求めた 本選挙 情勢

仄聞するマスコミ分析によれば、柴橋候補対自民推薦候補は、5対1や、2対1で、柴橋候補有利の初期情報でした。市民の「変化への期待」は濃厚でしたのに、自民推薦候補は「細江市政を継承する」と宣伝されたと聞きます。安倍政権総務大臣とのツーショットのポスターは、知名度強化ではなく自民政権への拒否反応を誘ったようです。7人立候補でしたが、首長選挙を事実上の一騎打ちに自民勢力が作り上げました。

同時実施の市議会議員補選は首長選と違う候補に投票する機会を与え、自民支持者に心の安定する場を提供したように見えます。インフルエンザと雪の影響は大きかった。

市議会 展望

議会は首長選の実戦部隊ではないわけで、二代表制として岐阜市民の市政を構築していく機関である事を、確認しなければ成りません。市民からは、落ち着いた環境を望まれています。

連絡先 市議会議員 松原のりかず 岐阜市沖ノ橋町1-21 でんわ 253-2500

